【令和５年度　授業改善推進プラン】

板橋区立志村第五中学校

【国語】

■生徒の状況	〈７学年〉 １学期定期考査において、正答率が８割以上の生徒が学年の２１％、７割以上の生徒が４５％いる（平均は６４点）。【思考・判断・表現】の問題の正答率が６３．４％、【知識・技能】の文法事項の問題の正答率が６４．５％である。 〈８学年〉 １学期定期考査において、正答率が 8 割以上の生徒が学年の７％、7 割以上の生徒が２１％いる（平均は５５．８点）。【思考・判断・表現】の問題の正答率が５５．２％、【知識・技能】の問題の正答率が５７．２％である。 〈９学年〉※「全国学力・学習状況調査」の結果 全体の結果において本校は東京都の正答率と同率、全国を上回っていた。また、評価の観点において「思考・判断・表現」の観点や記述式の解答の正答率が東京都及び国の平均正答率を大きく上回っているが、歴史的仮名遣いの書き換えや漢字の書き取り問題正答率が、都・全国の正答率を下回った。
■指導についての課題	〈７学年〉 語彙や文法など【知識・技能】の指導の充実及び指導方法の改善。 〈８学年〉 語彙や漢字など【知識・技能】の指導の充実及び指導方法の改善。また、期末考査の記述式解答において、係り受け等に問題があり、減点された生徒がいる。 〈９学年〉 語彙や漢字など【知識・技能】の指導の充実及び指導方法の改善。 学校全体のRSTの結果からは６つの領域の中で偏差値50を下回るものはなく、概ね文章を読み、理解する力がついていると考えられる。特に、具体例同定や推論については、能力値のグラフの山の中央が０よりも１に寄っており、既習事項を基に考えることができる生徒が多いことが分かる。しかし、係り受け解析については、能力値のマイナス側にもグラフの山があることから、一定数苦手な生徒がいると考えられる。
■授業改善に 向けての具体的な方策	振り返りの内容や授業内での課題、RSTの結果などから考察すると、読み取った内容や自分の考えを図や表・文章などで表現する力は着実に身に付きつつあるといえる。しかしながら、係り受け等を意識した、文章としての精度には課題があるといえる。今後も互いに文章を推敲する場面を多く設け、その際に係り受けなどに留意するよう指導する。 また、振り返りや「書くこと」の課題設定において、新たに学んだ語彙や漢字などを意図的に使用させるよう課題を設定することで、【知識・技能】の定着を図る。

【社会】

■生徒の状況	〈７学年〉 １学期末の授業アンケートの「授業の内容を理解できているか」という問いに対して、「そう思う」「だいたいそう思う」と答えた生徒は、89.5%であった。しかし１学期期末考査の学年平均点は、53点であり、また学年中央値も 58 点であることから、基礎的な学力が定着していない生徒が多くいると考えられる。また、観点別配点数に対する平均点の割合は「知識・技能」が 57%、「思考・判断・表現」が 42%であった。このことから、学年全体として特に「思考・判断・表現」に課題がある生徒が多いことがわかる。 〈８学年〉 １学期末定期考査において、「知識・技能」で 8 割以上正答した生徒は 18%、5 割以上は 45.1%であるのに対し、「思考・判断・表現」で 8 割以上正答した生徒が 14.4%、5 割以上正答した生徒が 45.1%であった。また、観点別配点数に対する平均点の割合は「知識・技能」が 56%、「思考・判断・表現」が 48%であった。このことから、学年全体として「知識・技能」と「思考・判断・表現」とも、定着に課題がある生徒が多いことがわかる。 〈９年生〉 １学期末定期考査において、「知識・技能」で 8 割以上正答した生徒は 40.4%、5 割以上は 80.9%であるのに対し、「思考・判断・表現」で 8 割以上正答した生徒が 21.4%、5 割以上正答した生徒が 65.4%であった。また、観点別配点数に対する平均点の割合は「知識・技能」が 66.8%、「思考・判断・表現」が 54.8%であった。このことから、学年全体として「知識・技能」よりも「思考・判断・表現」の定着に課題がある生徒が多いことがわかる。
■指導についての課題	社会的事象の意義や特色、相互の関連を理解させ、その知識を身に付けさせる。 社会的事象に関する諸資料から有用な情報を適切に選択して、効果的に活用し、自分の言葉で表現できるようにする。 学習したことについてキーワードを用いて、自分の言葉で端的に説明することができるようにする。
■授業改善に 向けての具体的な方策	○学習のねらいを明確に示し、授業の終わりに生徒が学習内容についてキーワードを用いて、短い文章で振り返る時間を確保する。 ○学習内容の定着を図るため、ドリルパークや Kahoot!などの ICT を取り入れ反復できるようにする。 ○授業内で様々な資料を示すことで、生徒の社会科に関する興味・関心を高める。 ○教科書や資料集の資料やグラフについて、内容を確認するとともに、そこから読み取れることを根拠とし、自分の考えをまとめたり友達と意見を共有したりする時間を設けることで、思考力・判断力・表現力の向上を図る。 ○公民的分野において、社会に関する身近な話題を授業内容に多く取り入れ、より具体的な事例を基に考察し、意見をまとめ、発表する機会を増やす。

【数学】

■生徒の状況	〈７学年〉 ２学期中間考査において、正答率が 8 割以上の生徒が学年の 21.5%いる（平均は 52.67 点）。基本的な四則演算の正答率は 69%を超えるのに対して、思考力を問う問題の正答率は 40%に満たない。また、授業アンケートで、「授業の内容を理解できている」という質問に対して「とてもそう思う」「少しそう思う」と回答した生徒は 93.1%で、学習意欲の高さが伺えるが、既習事項を適切に活用し、自分の考えを数学的に記述したり、発展させて表現したりする力の向上が課題であると考えられる。 〈８学年〉 １学期期末考査において、正答率 8 割以上の生徒が学年の 30%であった。（平均は 60 点）。基本的な知識・技能を問う問題の正答率は 60%を超えるのに対し、思考力を問う問題の正答率は 50%程である。授業アンケートにおいて、「授業の内容を理解できている」という質問に対し「そう思う」「だいたいそう思う」と回答した生徒は約 80%であり、学習意欲は比較的高く、基礎的な知識の理解はできている。一方で、身に付けた知識を活用して思考し表現する力を付けていくことが今後の課題である。 〈９学年〉 全国学力・学習状況調査の結果において、統計の分野に課題が残ることが分かった。年度末に取り扱う分野で、定期考査で自身の学習状況を確認する機会がなかったためだと思われる。図や表から必要な情報を読み取る力（イメージ同定）を伸ばしていく必要がある。 また、定期考査で、基本的な知識・技能を問う問題の正答率の平均が 84%なのに対し、思考力を問う問題の正答率の平均は 59%であった。得た知識を生かして解決する問題や自分の考えを思考し表現する問題を、引き続き重点的に学習させる必要がある。
■指導についての課題	本校の生徒は、hyperQU で「勉強には自分から進んで取り組んでいる」という質問に対して「とてもそう思う」「少しそう思う」と回答した生徒の割合が、全国の平均より上回っていて、学習意欲はやや高いと考えられる。しかし、文章を読み解いて解答する問題や複雑な思考を必要とする問題の正解率は 50%に満たない。思考力・判断力・表現力をどう伸ばしていくかが課題である。継続的・計画的に学習しないと身につかない力であり、継続的に学習する習慣がついていないとも考えられる。また、生徒がともに学び合う中で、「数学的な見方や考え方」をさらに育み、主体的に学ぼうとする態度を養うことも課題である。
■授業改善に 向けての具体的な方策	授業アンケートで「話し合い活動がもっとしたい」「振り返りの時間を伸ばしてほしい」という意見が多かった。上述の課題を解決するためにも、授業内で個人やグループで思考し、考えを伝え合う場を多く設定していく。また、授業ごとに学習内容を振り返り、知識の定着度合いを確認したり、自身の学習方法の改善を図ったりする時間を確保していく。これを徹底していくことで、生徒が主体的かつ積極的に活動する姿勢が身に付き、さらには全国学力状況調査の無回答率を下げることにつながると考える。 特に少人数習熟度別授業の発展コースでは、「数学的な見方考え方」を高めるため、問題解決学習、課題探究型学習、協同学習を多く取り入れ、「自力解決」「集団解決」「発表」の時間を取り入れた授業の展開を推進する。 授業のねらいを明確にし、生徒が本時の授業において見通しをもって学習に取り組めるよう、板橋区授業スタンダードや志五中スタイルを徹底していく。

【理科】

■生徒の状況	〈７学年〉 １学期期末考査において、「知識・技能」を問う問題で 5 割以上正答した生徒は全体の 61%、その中でも 8 割以上正答した生徒は27%であるのに対し、「思考・判断・表現」を問う問題で 5 割以上正答した生徒は全体の 53%、その中でも 8 割以上正答した生徒は24%であった。このことから「思考・判断・表現」について課題がある生徒がいると考えられる。また、基礎的な四則計算を伴う密度等の計算問題においても課題がある生徒が多い。 〈８学年〉 １学期の授業アンケートでは、『教科の内容について理解できているか』という問いに対し、『そう思う』と『だいたいそう思う』と回答した生徒の割合は合計 90.9%であり、多くの生徒が概ね理解していると考えられる。しかし、昨年度同様、計算問題に苦手意識をもっている生徒も多いため、授業内で計算の時間を十分確保し、基礎学力の定着を図っている。 ＜９学年＞ １学期期末考査において、基本的な知識や実験の基礎操作を問う問題の正答率は 74%と非常に高かった。一方で科学的な思考や表現力を問う問題の正答率は 56%であった。基本的な知識や実験の基本的な内容や操作方法は理解できているが、理科で最も大切な知識を利用して考え表現する力が十分身に付いてない現状がある。
■指導についての課題	〈７学年〉 何を目的として、実験結果から何がわかるのか順序立てて考察させることが課題である。そのために、自ら考え、班活動を通してさらに考えを深め、判断・表現する時間を確保していく必要がある。また、授業中に学んだ知識を身のまわりの事象と関連付け、振り返りを通して理解を深めさせていく。 〈８学年〉 １学期成績において『思考・判断・表現』の観点別評価で『Ｃ』の割合が 35%であった。このことから適切な用語を用いて、現象やその理由を説明することに課題がある。授業内で丁寧に書く時間を設けるとともに、模範を示し解説することで、文章を正確に書けるよう指導していく。 ＜９学年＞ 授業アンケートにも「授業内で問題を解いた後の班で話し合う時間」や「実験後の考察を考える十分な時間」がほしいとの声が複数あがっていた。また実際、授業後の「振り返りの時間」が十分とれていない。「個人や班で考える時間」の確保に課題があるのではないか。
■授業改善に 向けての具体的な方策	〈７学年〉 基礎的な四則計算の定着をはかるため、授業中に計算問題を解く時間を設定していく。また、実験のねらいを明確にし、実験結果を基に考えを深める時間を確保し、根拠をもとに考察する指導をしていく。さらに、振り返りを通して日常生活と関連付けて、基礎基本の定着を図っていく。 〈８学年〉 授業内で協働的な学習を進めながら、結果を基に考察を行う時間を増やしていく。また、実験結果が適正でない場合、因果関係を明白にしていくことで、思考力に向上に努める。それらを適切な用語を用いて表現する場面を増やし、『思考・判断・表現』力の育成に努める。 ＜９学年＞ 理科で最も大切な知識を利用し考え表現する力、日常生活に活かせる力を身に付けさせるためには、十分な「話し合いの時間」「実験結果の分析時間」「振り返りの時間」を確保する必要があると考えられる。ICT 機器の利用、実験時間を２コマにする、発表の時間を次時にするなど、もう一度授業や実験の内容や進め方を工夫し、時間確保に努めたい。

【音楽】

■生徒の状況	全体的に意欲的な生徒が多く、授業もよく取り組んでいる。1学期の授業アンケートの「音楽の内容は理解できていますか」という項目では90パーセントの生徒が「そう思う」「大体そう思う」という結果になった。コロナ禍による学習活動の制限は緩和されてきたが、引き続き感染防止対策をしながら、歌唱等の活動を行う必要がある。表現と鑑賞の学習活動の様子を見ると、表現（歌唱）活動に積極的に取り組む傾向がある。
■指導についての課題	コロナ禍による学習活動の制限は緩和されてきたが、引き続き、感染防止対策とコロナ禍の中でもできる音楽活動について考える必要がある。 得た知識や技能を用いて、実際の音ではどのように表現されているかを結びつけて聴いたり、表現したりすることを、音楽活動を通じて理解させる必要がある。 ICT機器を活用し、わかりやすい授業を工夫する必要がある。 話し合い活動や学習の様子を生徒同士で見合ったり、意見を出し合ったり、主体的に音楽の学習活動に取り組ませる授業の展開が課題である。
■授業改善に 向けての具体的な方策	音楽に関わる基礎的な内容を音楽活動やワークシートを用いて指導する。 ICT機器や祖聴覚教材を活用し、授業内容の充実を図る。 話し合い活動を取り入れ、他の人の意見から、自分の考えの幅を広げ、学習を深めるようにする。

【美術】

■生徒の状況	〈７学年〉 授業の取り組みは全体的に非常に意欲的である。課題内容の理解では個人差があり全体への説明では課題の理解、制作手順の理解が難しい生徒もいる。道具の扱いや片付けにおいては小学生までの基本はおおむね定着している。技能においては達成しようとする意欲はあるものの個人差がある。発想力においては自分自身の考えを深める事が得意な生徒が多くみられる一方で発想が苦手な生徒もいる。作品鑑賞や相互鑑賞では自分自身の考えを深めたり、文章での表現力が不足している。定期考査の平均点が 50.5 点と高くはないので、基礎知識の定着、学習の仕方が不十分であると考えられる。 〈８学年〉 作品制作は全体的に非常に意欲的である。集中力や聞く力がある生徒が多く、課題内容の理解が早い。技能においては達成しようとする意欲があり丁寧な制作が見られる。発想力においては課題に対してのキーワードの広げ方、自分自身の考えを深める事が得意な生徒が多くみられる一方で発想が苦手な生徒もいる。作品鑑賞や相互鑑賞では主体的な姿勢がみられるが、自分自身の考えを深めたり、文章での表現力にはやや差が見られる。定期考査の平均点が４９．３点と高くはないので、基礎知識の定着、学習の仕方が不十分な生徒が多いと考えられる。 〈９学年〉 作品制作は意欲的である。課題内容の理解は個人差があり個別に説明が必要な生徒はいるものの、ワークシートや手本を見ることで制作の流れを概ね理解し制作をすすめることができる。技能、発想においては個人差はあるが自分自身の技能を考え、その中で工夫し取り組んでいる。鑑賞においては主体的な姿勢がみられるが、自分自身の考えを深めたり、文章での表現力がやや不足している。定期考査平均点 62.1 点で基礎知識の定着、学習の仕方は概ね定着していると考えられる。
■指導についての課題	作品の進度に差が出る。 発想・表現の能力において個人差がある。 言葉での表現力が不足している。
■授業改善に 向けての具体的な方策	板書や掲示、物制作手順を記載したワークシートを活用し制作手順の確認をする。 ワークシートや板書で完成までの見通しを毎時もたせる。 資料集、教科書、プリントなどにその都度ライン等引くことで知識を定着させる。 発想力を広げるためのマインドマップ等のワークシートを用意し、言葉を書きだし、つなげていくことで発想の広がりを促す。 鑑賞ではお互いの意見を見たり聞いたりするなど発表の場を設けることで互いの表現力の幅を広げる。

【保健体育】

■生徒の状況	東京都児童・生徒体力・運動能力・生活・運動習慣等調査では、本校生徒の体力合計点は、男女ともに全国平均より少し低いが、東京都平均より高い状況にある。測定種目の中では、男女とも長座体前屈、上体起こし、反復横跳び、５０ｍ走が高い傾向にある。また、男女ともに握力とハンドボール投げが低い傾向にある。 生徒の体力要素のうち、瞬発力や巧緻性が低い傾向にある。 近年、運動するのは保健体育の授業のみという生徒が多くなっている。しかし、新型コロナウィルスによる運動の制限が緩やかになり、体育の授業や部活動での活動量が増え、全体的に体力が高まっている。
■指導についての課題	健康面での配慮を行いながら、体力や運動能力の向上を図る指導方法と内容の充実を図る。 深い学び合いができるよう、基礎的な知識を高める。 学習したことについて、キーワードやポイントを意識して体を動かしたり、説明することができたりするようにする。
■授業改善に 向けての具体的な方策	授業始めの準備運動の中で、瞬発力や全身持久力を向上するための補強運動を取り入れ、体力の向上を図る。また、種目に関連のある補強運動を取り入れ、運動能力、巧緻性の向上を図る。 話し合いや教え合いの場面を確保し、個人やグループなどで課題を見付け、根拠をもとに発表し、考えを共有する授業を行う。 教員が明示的な説明をし、イメージ同定や具体例同定の力を高め、身体で適切に表現できるようにする。 タブレットを使用して視覚的に自分の運動を振り返ることにより、課題を発見し、練習方法を考え、工夫する手立てとする。

【技術・家庭】

■生徒の状況	**技術** 　全体的に意欲的に授業に取り組み、授業内容を良く理解している。しかし答えのない問題を主体的に考えようとすることが苦手である。実習においても意欲的に授業に取り組み技能の定着が見られる。 **家庭** 〈７学年〉 　積極的に課題に取り組む生徒が多い。しかし実技での授業においては、コロナ禍であったためか、実施されていなかったようで、全くスタートからの指導となり、定着まではあと一歩というところである。 〈８学年〉 　何をするにしても、意欲的に課題に取り組んでいる。夏休みの課題や２学期に計画していた「食」に関する調べ学習は、個人でもそれぞれのパートを調べ上げ、班でのプレゼンに全員で協力して、素晴らしい発表をしていた。 〈９学年〉 　１学期の生命誕生から、命の大切さを真剣に考えていた。何事にも集中して取り組んでいた。２学期はおもちゃ作りを中心に実習しているが、使う幼児のために一針一針丁寧に縫っている。その時間にやるべき課題をしっかりとらえ、その目標をクリアしようと努力していた。
■指導についての課題	**技術** 　授業内容を理解する力はあるが、答えのない問題に対して「何が問題なのか」「どうすればより良くなるのか」を主体的に考えようとする意識が低い。平均的な技能の定着は見られるが、発展的な技能の定着が進んでいない。 **家庭** 〈７学年〉 　静かに授業は受けているが、実際ワークシートなり、実習になると、全体の説明を整理して、なにをやるべきなのかを、すぐ実行に移せないところがあった。説明されていることに集中することが難しいようである。 〈８学年〉 　授業の内容をきちんと整理して、しっかり理解することに努めている。実技は生活の中での定着ということも多いので、授業だけでなく、生活の中で繰り返されるようにしていきたい。 〈９学年〉 　やるべき目標に対して、その目標を達成しようとする姿勢が多くみられた。ただ技能面では、もう一歩というところである。何度も繰り返すことが必要である。
■授業改善に 　向けての具体的な方策	**技術** 　問題に対して答えをすぐに教えるのではなく、考える材料と時間を増やし、問題解決に至る道筋を考えさせる。進度に合わせてより高度な技能に触れさせ定着を図る。 **家庭** 　全学年に通じることであるが、実体験の経験が乏しい生徒が多いため、常に家庭でのお手伝いを推奨していく。そして今後生活するために必要な知識と経験を、授業の中で伝えていく。また早く課題が終えたものが、遅れている生徒に教えてあげるという場面を多く取り入れていく。

【英語】

■生徒の状況	〈７学年〉 授業に関してはおおむね意欲的に取り組んでいるが、学力の差が大きくなっている。１学期期末テストにおいて、正答率が３割以下の生徒は 26.2%、8 割以上の生徒が 25.2%（平均 54.3 点）いる。また、授業アンケートにて、授業を理解している生徒は 81.8%いる。 〈８学年〉 授業アンケートにおいて、98%の生徒が授業内容を理解しており、自分の考えを深めたり、学級や班で話し合ったり、発表したりすることが含まれるのが英語の授業であると全員が認識していることが判明した。その一方で、１学期期末考査では正答率が三割以下の生徒が 20%（平均 53 点）、評定では１、２の生徒 13%おり、学習内容の定着に課題がある。また、定期考査の思考・判断・表現の問題において、短文の内容を日本語でまとめる記述式問題では、45%が無回答、85%が不正解となっている。 〈９学年〉 ９年になり学習内容の難易度が成り上がっているが、全体として授業に意欲的に取り組んでいる。授業アンケートの結果によると、85.3%の生徒が授業を理解している。 全国学力学習状況調査の平均正答率は 54.0%で全国平均（45.6%）を大きく上回っている。
■指導についての課題	〈７学年〉 期末テストの知識・技能の正答率が 58.6%であることから、基本的な語彙、文法習得に課題がある。また、思考・判断・表現に関し、場面に応じた表現を書く問いでは、正答率が 42.6%であることから、英語の語順に注意して書くことにも課題がある。授業の中で、話したことを書く場面を増やす必要がある。 〈８学年〉 授業のふり返りのやり方が習熟度別授業の指導者裁量になっており、学年で統一されていない。そのため、単元でのめあてに対して、何を定着させるかを共有することが今後の課題となる。また、英文読解においては、具体的な読み取りが不十分である。 〈９学年〉 全国学力学習状況調査の結果を観点別に見ると、知識・技能の正答率は 62.1%（全国 51.5%）、思考・判断・表現の正答率は 45.6%（全国 38.8%）であった。学習した知識や技能を活用して、思考したり、表現したりする力を高めることが今後の課題である。また、長文の読解力を高めるために、英文の基本構造についての理解を深める必要がある。
■授業改善に 向けての具体的な方策	〈７学年〉 基本的な語彙、文法習得に関しては、小テストや単元テストの回数を増やし、スモールステップで知識・技能の定着を図る。また、場面に応じた英語を書くことができるように、授業の中で自分が話したことを書く欄をワークシートに設け、「言えるし書ける。」という状態にする。 〈８学年〉 授業で学んだことを定着させるために、学年で統一したフォームを利用した振り返りを授業で必ず行う。そして、つまずきを全体で共有し、分からないままにしない。その他授業や家庭学習で ICT 教材を活用し、客観的に生徒が自分の英語力を測る機会を設け、学習への動機付けを行う。また、英文読解で代名詞 that が示す内容を答える記述問題等の対策として、同義文判定を実施する。思考・判断・表現の力を伸ばすために、「あなたなら」どうするかの視点を入れた表現活動や考えることに時間をとる。 〈９学年〉 学習した内容を知識で終わらせるのではなく、コミュニケーション活動につなげることで表現力の向上を図る。 長文の読解力を高めるために、英語の文章の組み立て方に関する指導を実施する。その上で、教科書本文の読み取りにおいて、TF 問題や内容理解に関する質問に答えさせる機会を増やし、書かれている内容を正確に読み取る練習を授業で実施する。